
放課後異世界部

朋川禾弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後異世界部

【Nコード】

N3097BA

【作者名】

朋川禾弥

【あらすじ】

普通の女子高生ヒナは何故か放課後、異世界でアルバイトをする事に。

ゆるい異世界物始めました。

1話

私立らしさを兼ね備えた大きな門を開放し生徒で賑わう朝の正門。
ある四人の生徒が歩けば皆が道をあけて見入った。

「まあ、異世界部の方々よ」

「今日も皆さん素敵ね」

「本当、とつても近寄りがたいわ」

学園自慢の制服に身を包み颯爽と歩く

彼ら四人はこの学園では有名人的な扱いを受けていた。

容姿もさることながら家柄や成績など全てが完璧なのであったりと
何かと話題に事欠かない三人の男子生徒と、学園一の美少女。

2

それが彼ら”異世界部”の部員である。

四人を見守っていた一人の生徒がふと呟いた。

「でも異世界部って何をやっているのかしら？」

「さあ？」

「私も入ってみたい」

「私も！」

女子生徒たちが楽しそうに騒ぐ横をすり抜けるように歩く一人の生徒は
心の中で呟いた。

(そんないいもんじゃないのに)

すると後ろから同じクラスの友達が声をかけてきた。

「ヒナ、今日は異世界部だっけ？」

学内の有名人ばかりが集う異世界部にただ一人ごく平凡な生徒がいた。

それがヒナだった。

異世界部の部員である水野ヒナは他の部員と離れて登校していた。

「う、うーん・・・そうだっけ・・・」

今日金曜日は異世界部の活動日なのだが、
現実を見たくないがために曖昧に答えた。

にもかかわらず早々現実に引き戻される事になった。

「おーいヒナー!..!」

「げっ流依先輩っ」

異世界部の部長を務めている宇都宮流依が大勢の生徒に囲まれた中
こっちに向かつて手を振っている。

見つからないようにコソコソと学校に入ろうとしていたのに
見つかってしまった。

「先輩が呼んでるよ?」

「聞かなかったことに……」

「先輩が手を振ってる……いいなあ」

彼は特に女子生徒に人気が高かったりする。

「ヒーナー!!」

無視されようとしているとは気付かない流依は、

ヒナに気付いて貰うために更に手を大きくブンブンとふり乱した。

とっっても嬉しそうに。

クールだと思われがちな彼は実はとても親しみやすい人物だったり
する。

流依が手を振り名前を呼ぶので自分まで注目される結果になった。

ヒナは注目されるのが大の苦手なのだ。

そんなヒナの心情をしるよしもない流依は満面の笑みで言った。

「今日は異世界部だぞっ」

その笑顔がとても腹立たしい。

いっそのことあの綺麗な顔をぶん殴ってやりたい衝動に駆られた。

私はある事件のせいでこの怪しい部活に入ることになったのだ。

ある事件というのは放課後、吸い寄せられるように

物置として使われている部屋に立ち入った・・・ことが失敗だった。

普段は鍵がかかっているはずなのにドアは開いていたのだ。

中に入ると鏡が目に入った。

随分掃除されていないはずだが埃がたまっているのは枠のみで、

薄暗い部屋の中妙に鏡自身がなんとも言えない存在感を放っていた。

普段のヒナは怖がりのはずで暗いところが苦手なはずだが

何故か室内に一步を踏み出してしまった。

不思議に光る鏡に魅入られるように。

”触れてみたい” そんな衝動にかられてしまった・・・。

そして手を伸ばしたその時指は鏡をすりぬけ我に返った。
これはヤバイ。

一気に恐怖に駆られるが意思とは反対にどんどんからだは鏡へと引き込まれる。

「ちょっと、何これ!?!」

開け放されたドアを見る。誰もいない。

「誰か助けて――――!!!!!!」

それでも必死に声を上げた。

「もが――――!!!!!!」

「もが?」

「クスクス」

「え?」

必死になりすぎて目を瞑っていたらしい。
目を開けると学校の有名人四人と

「全員そろったようだな」

銀色の髪に白く重そうなローブを纏い大きな杖を持った
いかにも魔術師風の格好をした男がたっていた。

しかもさっきまで学校の室内にいたはずなのだが、
今いるのは円形のホールのような部屋だった。

これが始まりだった。

2話

「何々?どつなってるの!？」

銀髪の怪しい男は別にして、他の四人は紛れもなくウチの学校の生徒。

ということは

「ここは学校？」

「いや、違う」

そういったのは眼鏡をかけた生徒、小笠原拓斗。
クールで大人びた雰囲気醸し出している。
宇都宮家と並ぶ大企業の御曹司でもある。

「まだ俺達も説明を受けていないんだ。

ただいえる事は皆鏡を伝ってここにきてしまったらしい」

「そんな!?!じゃあここは何処なんですか!？」

学校にいたはずなのに学校じゃないなんて信じられない」

「信じられないんだったらソコの窓から外を眺めてみたらどうだ」

言われて窓まで駆けていき、窓の外を眺めた。

そこに広がっていたのは見なれた学校近辺の風景ではなく、美しい自然の広がった景色と中世ヨーロッパを彷彿させる町並みと塔が目に入った。

見降ろしてみると自分が今いる場所も何かの塔だということが分かった。

「な・・・何これ・・・」

動揺しているヒナの肩に手を置く人物がいたので振り返ると学園の女子の憧れである高城流依がヒナの目を見つめた。

学校の女子の間で大人気な彼の顔立ちは男子生徒に興味のないヒナですら宇都宮流依が男にしては綺麗すぎる容姿の持ち主だという事は理解できた。

そんな宇都宮流依はヒナに向けて言葉を発した

「そっちの窓からは城が見えるぞ！」

それも目を少年のようにキラキラと輝かせて。

しかし状況を受け入れきれないヒナにはとても見に行く気は起きなかった。

「皆あの教室の鏡からこの異世界に来たうちの学校の生徒というのは間違いない」

小笠原拓斗はなおも冷静に説明をしてくる。

・・・異世界・・・皆鏡に吸い寄せられて・・・。

「うん、直接は知らないけど皆見たことある人ばかり・・・」

知らない場所に紛れ込んだのは自分一人ではない。
それが唯一の支えだった。

「という事で自己紹介だ！」

宇都宮流依は張り切って言った。
さっそく仕切ろうとしている。

「さて、ようやく揃ったのだアナタ達が
ここへ召喚された経緯を説明させてくれないか？」

そこで魔術師風の男がようやく話に割り込んだ。

「おおーそうだった!！」

宇都宮流依はやはり楽しそうに向き合った。

「ずっと気になってたのに忘れてたわぁ」

学園一の美少女だと言われている月島絵莉依がおっとり微笑む。

「うむ、聞いてやらんでもない」

小笠原拓斗が腕を組んで頷いた。何だか無駄に偉そうだ。

「・・・あ・・・ああ、ありがとう」

(やりずらそうだなあ・・・)

どうやら不安がっていたのは自分だけだったようで
他の4人の無駄な落ち着きようをみてヒナ自身もようやく落ち着く
ことになった。

(現実だとこんなもんなのか・・・この人達が神経図太すぎるのか
・・・)

「あなた達をここに呼んだのは我が国を救ってもらったためだ」

そこでようやく最後の一人が口を開いた

「来た来たお約束」

彼は吉原レン、三人とは別の意味で有名な彼は長身でオレンジの髪威圧的に見た目が不良っぽく、出来るなら怖くてかわりたくない先輩ナンバー1だった。

「頑張ります!!」

宇都宮流依は張り切って答えた。

「まだ何も聞いてないだろ」

小笠原拓斗が突っ込んだ。

この二人はよく一緒にいる事で有名だがボケとツツコミでなりたっているのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3097ba/>

放課後異世界部

2012年1月8日02時47分発行